

*****ここから『電子耕』*****

隔週刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』 第113号

-健康・農業・食・図書・人物情報・高齢者と若者の交流誌-

<http://nazuna.com/tom/>

2003. 7. 10 (木) 発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

*****発行部数 1761 部*****

<キーワード>

健康・食べ物・農林園芸・図書を中心とした情報を提供し、庶民の歴史も残す。高齢者と若者の交流ミニコミ誌。お互いに情報を交流しましょう。

★重要なお知らせ★

電耕掲示板

<http://6201.teacup.com/tom/bbs?>

の運用方法を変更して「原田勉からのお知らせ専用掲示板」とします。

ご意見・感想・お問い合わせは、メールでお願いします。

tom@nazuna.com

★

□ 目 次 □-----

<読者の声>

紀平さんから、大橋さんから、丹羽さんから、中原さんから、上田さんから、長谷川さんから、林さんから、常行さんから、斎藤さんから、高谷さんから、愛媛のピエロさんから、明神さんから、森さんから、斎藤さんから

<舌耕のネタ>「長寿の秘訣・楽しく遊ぼう」

<募集・うどん打ち実演>大久保さんの高齢者と女性にやさしい方法指導

<話題図書>「大養生」百歳人生に近藤康男登場 文芸春秋社7月増刊号

<晴耕雨読10>農村クラブの子どもたち 田んぼのおばさん

<丹羽敏明の戦争体験>13、シンガポール・要領をもって本分とすべし

<日本たまご事情>「シンガポール・たまご事情」愛鶏園・斎藤富士雄

<森 清の読後感>丸谷才一『輝く日の宮』2003年6月 講談社刊、

<ガンとの闘い>納得のゆく治療は患者自身の判断で (原田勉)

<私の近況報告>6月26-7月9日 (一日一日を楽しく動く)

<読者の声> (メールには出来だけ返信していますが、『電子耕』だけで返信・コメントすることがありますので、ご承知ください。また<農業・図書情報>は読者からも寄せられますができるだけ載せています。原田から)

■6/23 紀平さんから：(抜粋)

森さんの書評は毎回楽しみにしているコラムのひとつです。
意欲的な生き方が伝わってきて、またさまざまな見方があるのだなと感心し、目が離せません。

●原田からのコメント：

お忙しいのにメール有り難うございました。

■6/26 大橋さんから：

申し訳ありません、112号を開くまで全く気がつきませんでした。
前回のメールに『晴耕雨読』10を添付し忘れていたのです。
あまりの間抜けぶりにわれながらあきれています。
長沼の麦刈りの後、田植え、明野村の麦刈りと順調に農作業を終えました。
なんと、この間に高速道をへも初デビュー。
これからは自力で畑に通えるので、楽しみが膨らみます。

学校図書館を考える仲間も少しずつつふえ勉強しなければならないことも多いのですが、子どもたちとふれあい、自然と触れ合いながら、少しでも前に進みたいと思います。

HP、回復しました。

田んぼのおばさん

<http://homepage3.nifty.com/half-farmer/index.htm>

●原田からのコメント：

私のほうこそ気がつきませんでした。ごめんなさい。
創刊4年目の113号に載せます。
実に良い「晴耕雨読」にふさわしい内容でした。
感謝しております。

■6/26 丹羽さんから：

112号の配信有り難うございました。

112号でチャンギー刑務所で刑死された方々の辞世の歌を御紹介しましたが、今回は刑務所生活を体験された方の記録（短歌）をご紹介します。筆者は私が収容されていたリババレー作業隊の経理責任者（主計大尉）で本間広美氏。所属部隊の南方軍野戦自動車廠が英軍捕虜を使ったためクルアンの検問所でブラックキャンプに収容され、部隊員800名がチャンギー刑務所に連行されて約4か月間、苛酷な獄中生活を送られました。本間さんは明治40年生まれ、短歌は北原白秋に師事され、作業隊の機関誌紙の投稿短歌の選者を勤められました。平成8年、89歳で亡くなりました。

『鞭ふられ屠殺場の如き鉄の門追い込まれくぐる隊はバラバラ』『胸底に響くが如き扉は締め互いに見合わす蒼白の顔』『猛獣の檻より剛き鉄格子いま容れられて監視されをり』『物言えば鞭の飛び来る食堂に暫しは物をすする音のみ』『獄卒は冷たき眼光らして丸窓明けて中視きゆく』『コンクリートの床の堅さよ腰骨にあたりて痛し薄き敷もの』『空腹にいねられぬらしあちこちに尿する音廊下にひびく』『仕事仕事と責め立てらるるも術なきに石もてたたく同じ処を』『隣室と交わす信号側壁をたたきて語る飯の事など』『針の孔に糸通さんと苦しむを知れば手伝う老将に寄り』『日に増して肉は落ち去りあばら骨凹凸あらわ赤道の陽に』『老将は痩せこけ特にあわれなり皮かぶせたる骸骨にして』『わが妻よ必ず還る事ありて今獄なれど吾子をたのむよ』『母上よわれ獄なれど恥ずるなし老身いたわりすこやかにいませ』

●原田からのコメント：

いつも感動する歌をありがとうございました。

過酷な刑務所のこと、ぜひ現代の有事法賛成者に聞かせたいですね。

■6/26 中原さんから：

今日、電子耕をいただき、そうだ7月5日には、お目にかかろうと思いましたが、（当日は12時までJ A/ I T研究会がありますので、総会には遅れますが、山崎農研に出席させていただく事と致します、）
電子耕は、今回もまた、齊藤さん、森さん方のお話、ご説にうなずきながら拝読いたしました、

しばらくは、梅雨空のもと、くれぐれもお体にお気を付けられて、ご活躍下さいませ、

●原田からのコメント：

7月5日にはぜひ会いましょう。松坂さんが独り元気に張り切っています。見習わねばと思います。

■6/27 上田さんから：天然農薬除虫菊の復権にご協力ください

天然農薬除虫菊の復権を目指して、
研究専門のサイト「除虫菊ワールド」
を開設しました。

生産者には無償のサンプルが用意されております。

<http://www.jochugiku.net/>

是非除虫菊実用化の共同実験にご参加ください。

天然農薬を考える会

兵庫県西宮市津門稲荷町 5-10

0798-36-1008

事務局長：上田道富

info@jochugiku.net

●原田からのコメント：

ホームページも拝見しました。

良かったら、7月10日の次号に掲載します。

ご返事ください。

■7/2 RE 上田さんから：

早速のご返事と7月10日号にてご紹介とのご配慮

をたまわり本当に有難うございます。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。

春先に農水省農薬対策室（7月1日より農業安全管理課）を

訪ね、除虫菊に関する当方の構想や熱意を訴えたところ

今回の農取法改正は

「農薬の販売や使用に関してこれまで以上に規制を厳密にし、罰則規定を強化する」のが目的であり、

特定農薬制度は

「合成農薬に対する規制を強化し代わりに天然系資材の活用に道を開くという主旨で作られたものではない」

また「除虫菊粉末については検討しますが、基本的には農薬登録すべきだと考えている」と説明されがっかりしました。

除虫菊粉末を農薬登録するには「何億円以上の莫大な開発費と約9年に及ぶ審査期間」が必要であり、今更そのようなコストを掛けていては製品価格が高くなり全く売れなくなる。

除虫菊は戦後間もなく安価な合成農薬に取って代られるまで約100年間安全で優れた天然農薬として利用されていたのに、これでは日本国として実質的に除虫菊を自ら未来永劫追放してしまうことになり、重大な国益の損失ではないかと迫りましたが、それは当省の関知しない問題であると開き直られました。

また農水省は特定農薬の指定に当たり

「農薬メーカーが農薬登録に当たり多大な労力と費用を掛けて試験を実施していることとの公平性の確保が必要」と公表し合成農薬メーカーの利益を損なうようなものは認めないとの官業暗黙の了解があるようです。

農水省の担当者は「除虫菊の成分のピレトリンと合成ピレトリンは同じ物質」と農水省のホームページに堂々と記載しております。バターとマーガリンは同じ物質だと公言しているようなものでこのような認識レベルで特定農薬の評価をされてしまうのかと思うと残念でなりません。

またこれまで「農水省と環境省の合同審議会」で「評価の指針」に基づき指定作業を進めると説明しておりましたのに、

昨日農水省ホームページで突然渡辺農林水産事務次官 6.30 談話として特定農薬の指定は7月1日発足した内閣府の「食品安全委員会」に諮問すると突然発表しました。

では今までの合同審議会はこの仕事はどうなってしまうのでしょうか。まったく合点がいきません。

100年以上にわたり除虫菊が薬害や重大な環境汚染を引起した事例報告は聞いたことがありません。

これほど安全性が実証されている防除資材は他に見当たりません。

私達は天然農薬除虫菊の再普及をもちろんビジネスとして推進しております。

机上の空論ではなく、除虫菊粉末が特定農薬に指定されれば日本（中国も含む）の環境保全型農業の発展に大きく貢献出来るエコビジネスが成り立つものと堅く信じております。

是非このプロジェクトの推進にお力添え頂きますようお願い申し上げます。

■6/28 長谷川さんから：

丹羽さんから、丸山定夫や園井恵子を好きな俳優だったとのメール、うれしく拝読いたしました。

「桜隊原爆忌の会」にかかわっていて年々9名の犠牲者を知る方が少なくなっていくことに寂しさを感じています。特に丸山定夫をご存知の方はそのユニークさと芸のうまさを絶賛します。

舞台や映画をご覧になった方また直接ご存知の方にぜひ参加していただき、お話を伺いたいと願っています。

丹羽さんにも8月6日お時間がございましたら、目黒の五百羅漢寺で行われる「桜隊原爆忌の会」へご参加いただけたら嬉しいです。今年は会の会長でもある女優中村美代子さんが「桜隊と私」ということで生前の丸山定夫の事を中心に講演をいたします。詳しくは「桜隊」のHPをご覧ください。

嬉しくて会の宣伝ばかりになってしまいました。すいません。でも皆さんに参加していただきたくて。

最後に芝居大好き人間として、「電子耕」の後ろのほうに乗っている劇団文化座の「若夏（うりずん）に還らず」おすすめです。一森口豁「最後の学徒兵」を脚本にするよう言われた脚本家が悩み苦しんでタイムスリップしてしまい、学徒兵と同じ体験をする。若い人たちにも充分楽しめ、考えさせられる作品です。再演ですからより良くなっているでしょう。私もまた観たいと思っています。

「夢のかげら」

<http://www.h3.dion.ne.jp/~nanchan/>

「桜隊」

<http://www.h6.dion.ne.jp/~skr-tai/>

●原田からのコメント：

熱の入ったメール有り難うございました。

ホームページも全部拝見しました。

ひでおばあちゃんの話は秀逸ですね。感心しました。

「桜隊のホームページ」も全部拝見。痛ましい限りです。

8月6日の会には参加したいと予定しておきます。

その前に文化座にも7月17日に観劇の予定です。

先日、遠藤慎子さんに会いまして、あなたのことを
教えてもらいました。

今後もぜひよろしく願います。

■6/29 長谷川さんから：

早速お返事ありがとうございます。

お忙しいのに私のホームページ見ていただきとてもうれしいです。

なかなか更新が出来ずにいますが、時間を見つけて続けていきたいと思っています。

これも原田さんのご本にめぐり会えたおかげです。

8月6日ぜひご参加ください。

案内状をお送りしたいと思いますのでご住所教えていただけたらと思います。

屋食の関係がございますので、正式にお申し込みいただけたら有難いのですが。

17日に文化座にいらっしゃるとのこと、その日はパソコンサークルの日で残念ですが、またお会いできません。

今友達に声をかけていますので、皆さんの都合の良い日になると思います。

8月6日にはきっとお会いできますように。慎子さんとお待ちしております。

■6/27 林さんから：

私は終戦前の1年間、和歌山市松江、住友金属で、学徒動員に参加していました。工場で旋盤を操作しました。このような経験の記録がなかなか見当たりません。なにかご示唆を下さいませんか。

●原田からのコメント：

いろいろガッパッテいますね。

今回は私宛ですから、ご返事します。

私は1943年昭和18年に予備校生から徴用になり、

中島飛行機のエンジン試運転工をしていました。

零戦のエンジンテストです。44年ころから、中学生や女学生も動員されて、

武蔵製作所で働き、空襲で亡くなった方もあります。

詳しくはホームページの「戦争を語り継ぐ」をご覧ください。

<http://nazuna.com/tom/war/index.html>

◆常行さんから：

はじめまして。突然のメールを失礼いたします。

私は山梨県清里にございます財団法人キープ協会の常行と申します。八ヶ岳の麓におきまして、高冷地酪農・環境教育事業・国際協力などを行っている財団です。

3年前より、地元の方のご協力をいただきながら、昔ながらの米つくりと生物調査、文化調査、教育研究を行う「八ヶ岳たんぼの学校」を行っております。米作りでは、できるだけ機械に頼らず、無農薬有機還元の肥料を使いながら行い、米作業と生き物たちの営みを、生物調査で明らかにしたいと思いつながりながら活動をしています。

この夏、環境教育事業の一環で下記の通り、トンボとたんぼをテーマにした宿泊事業を実施いたします。

たんぼはお米の生産の場だけでなく、教育の場、生き物や風景を保全する場としても大きな可能性を持っていると思います。

この事業では、トンボの生活を通して、たんぼの公益性と多様性を確認する場にしたいと思っており、ゲストに農文協の「たんぼの学校 まなび編、あそび編」を執筆した湊 秋作、赤トンボとたんぼのかかわりを調べる全国調査を行っている新井 裕氏を招いて実施いたします。

まぐまぐで原田様の HP 及びメールマガジンを拝見いたしました。

広く多くの皆さまにこの事業を知っていただきたく、差し支えなければ、

貴社メールマガジンに掲載していただくことは可能でしょうか？

本来ならばお電話で直接お願いさし上げるべきですが、

あいにく HP からご連絡先が分かりませんでしたので、メールにてのお願いで失

礼いたします。

下記に広報掲載用のデータをお送りしますので、是非ご検討いただきたく、お願い申し上げます。
突然のお願いで大変恐縮ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ここから**

第1回かがくの寺子屋

「トンボと人のお付き合いー田んぼが結んだ赤い糸ー」

詳しくは↓

<http://www.keep.or.jp/FORESTERS/tera001.htm>

◆開催主旨

爽やかな風が吹き抜ける高原の7月、八ヶ岳の森から田んぼから、たくさんのトンボが羽化をして空に飛び立ちます。
トンボの仲間には、日本の季節や田んぼの営みを上手に利用しながら生活を送っている種類がたくさんいます。
唱歌「赤とんぼ」などにも歌われ、私たち人間にとって身近な生き物トンボ。

皆さんはそんなトンボをじっくりと見たことはありますか？
目の数はいくつ？耳はどこについている？そしてトンボはどこで生まれ、どんな生活を送っているのでしょうか？

トンボの暮らしを知り、トンボの視点に立って自然を見ることで、自然界と田んぼと人間との関係図が見えてきます。
トンボの暮らしを通して、人と自然との関わり方、田んぼの価値を一緒に考えてみませんか？

◆「かがくの寺子屋」では…

生き物の暮らしを「なぜ？どうして？」という視点で見つめます。
調査や観察を通して自然の仕組みを考察します。
自然界の「なぜ？」に気づき、知るワクワクを楽しみます。

◆ゲスト紹介

新井 裕(あらい・ゆたか)

NPO法人むさしの里山研究会理事長

理屈ではなく実践活動を通して里山の自然を守る

「NPO法人むさしの里山研究会」を設立。

田んぼのめぐみを実証するための、赤とんぼの全国調査を、

「(社)農村環境整備センター」「NPO法人農と自然の研究所」と協働して行っている。

著書として「トンボの不思議」(どうぶつ社)など。

湊 秋作(みなと・しゅうさく)

財団法人キープ協会 やまねミュージアム館長

八ヶ岳田んぼの学校教頭

26年間の小学校教諭時代にヤマネ研究の傍ら、田んぼにおける

原体験教育・環境教育・湿地保全活動にも積極的に取り組む。

八ヶ岳田んぼの学校の教頭として、教育研究やスタッフの研究指導にあたっている。

著書として「田んぼの学校 あそび編・まなび編」(農文協)など。

◆開催概要

・日程：2003年7月19日(土)～21日(月) [2泊3日]

・講師：新井 裕 (NPO法人むさしの里山研究会理事長)

湊 秋作 (財団法人キープ協会 やまねミュージアム館長)

・主催：財団法人キープ協会

・開催地：山梨県清里高原キープ・フォレストーズキャンプ場

・対象：16歳以上一般

トンボの生態系に興味のある方

田んぼを新しい教育の場として考えていきたい方

八ヶ岳の森や田んぼを満喫したい方

休耕田の活用やビオトープに興味のある方 など

・定員：30名

・参加費：一般 35,000円、学生 30,000円

※参加期間中の全ての経費を含み、全日程参加が基本です

◆お申込み方法

ハガキ、FAX、E-mail、ホームページのいずれかで

以下の項目をご記入の後、ご送付下さい

1.「第1回かがくの寺子屋」参加希望

2.お名前(ふりがな) 3.郵便番号・住所 4.電話番号

5.職業（学校名） 6.年齢 7.性別 8.参加の動機
9.何のメディアを通じてキャンプを知ったのか 10.E-mail アドレス

◆お申込み・お問合せ先

財団法人キープ協会 キープ・フォレストーズ・スクール

〒407-0311 山梨県北巨摩郡高根町清里 3545

担当：常行（つねゆき）

TEL:0551-48-3795 FAX:0551-48-2990 E-mail forester@keep.or.jp

URL:<http://www.keep.or.jp/FORESTERS/>

★お申込みをお受けした方には1週間以内に受理通知をお送りします★

-----ここまで-----

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。ホームページも拝見しました。

私の電子耕は、次の発行が7月10日ですが、良かったら掲載します。

講師も知らない人ではないので。

なお、農文協のホームページにもリンク集

<http://www.ruralnet.or.jp/links/links.html>

リンクのご希望は

<http://www.ruralnet.or.jp/links/request.html>

がありますので、申し込んだらいかがですか。

■7/2 斎藤さんから：

原田先輩

昨日、『大養生』（文芸春秋）、

<http://www.bunshun.co.jp/rinzou/daiyojo/daiyojo.htm>

『21世紀水危機』、

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai008.html>

受け取りました、有難うございました。

「電子耕」への投稿がなにか「生きている連絡帳」のような役割を私にはしてくれています。

大袈裟に言えば今月も生きて書くことが出来た、、、と言うか、とにかく有り難い事です。

病気をする前はただ忙しさにまかせて、その日を夢中で過ごしておりましたが、

病気以後一日一日がとても貴重になりました、病気の効用と言えるかも知れません。

ある程度腹を括ってみますと、これからなすべき事がおぼろげながら見えてきたように思えます。

●原田からのコメント：

電子耕も4年目を迎え、新しい読者が増えて、「50円のタマゴ、15円のタマゴ」を知らない人もあります。

改めて、「愛鶏園の5つのこだわり」を連載してくださいませんか。

とくに、前にマスコミで問題にした「抗生物質」「遺伝子組み換えのとうもろこし」など、今日の角度で取り上げたらいかが、と思います。

そして、秋頃には見学会をしたいとおもいますが、いかがですか。

7月30日（水）には農文協図書館で簡単な「誰でもできるうどん打ちの実演」をやる予定です。骨髄腫の数値が安定して医者から夏休みをもらいました。

現金なもので、それから元気でどこかに行きたい気分です。

■7/5 高谷さんから：

突然のメール失礼いたします。高谷滋（タカヤシゲル）と申します。

中島飛行機というキーワードで検索をかけて、原田様の2003.1.9付けHP

<http://nazuna.com/tom/war/index.html>

「電子耕」を知りました。

私は昭和32年生まれで、武蔵野市八幡町4丁目（旧 関前）で少年時代を過ごしました。そのころからいくつか知りたいことがあって、

原田様をご存知ではないかとメールをお送りしました。

当時昭和30年代には、今八幡町2丁目中島飛行機の跡地にはすでに、グリーンパークと呼ばれる米軍宿舎が建っており、駐留米軍の住居になっておりました。西側の広い道路の向かい側が私の住む都営住宅で、父母は徳島から応募してこの都営住宅に当たって、上京してきたと聞いております。

少年時代には、まだこの都営住宅の東側に煙突が建っていて、子供仲間の間では'ボイラー'と呼ばれていました。

また中央部には、おおきな太いケヤキがある遊園地があり、草野球をやって過ごしたのをよく覚えています。

住宅の南側に旧関前小学校（現千川小学校）と盈進高校がありその門は1.5mぐらいの高さのコンクリートで小学校と、盈進高校

の反対側に同じ格好をして建っていました。盈進高校の前の土地には空き地となっていました、コンクリートの床が広がっていました。

小学校の学区内では、よく不発弾処理もありましたが、私たちの生活と、戦争中の中島飛行機の様子はかなり、断絶していました。

中島飛行機との関連は最近、インターネットで調べるようになってからいろいろ知るようになりました。

私はいま、私が住んだ地区の身近なこれらの痕跡が中島飛行機の施設と関連があったのかどうか、とても知りたく思います。

今、私自身会社の技術者として、生産に携わっているものとして、戦争中の技術者の皆さんがどのような風景をみて、何を考えていらしたのか、戦後の断絶した歴史観を超えて、同じ技術者として共通の思いがあるのではないのか、私にとっては、故郷がどのような歴史を抱えていたのか、とても興味があります。

1. 今、境浄水場から東伏見方面に抜ける南北の道路は中島飛行機の試験滑走路になっていたというのは本当ですか？
2. エンジン以外の機体も製作していたのでしょうか
3. その道路の西側一帯（千川上水まで）には、何があったのでしょうか？病院があったというのは本当ですか？ボイラーと呼ばれる建物は何の施設だったのでしょうか？
4. 中央部の大きなケヤキのある土地（現遊園地）は何だったのでしょうか。南西から北東方向に伸びる、道路（名は大師通り）の形状はここにあった建物と関係がありますか？
5. 小学校と盈進高校の周辺には何の施設があったのでしょうか？門と関係がありますか？

もし、ご存知のことがあって、教えていただけたら、光栄に存じます。身勝手な要望ですが、よろしくお願いします。

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。

中島飛行機武蔵製作所物語、という記事が連載されている「季刊むさしの」（武蔵野市役所広報課）で2001年から2003年春まで7回、長沼石根さん

が書いているのがあります。そこに詳しく出ています。

武蔵野ではエンジンが中心で、私は田無試運転工場勤務で他のことはよわかりません。機体は作っていない。滑走路もなし。

■7/6 高谷さんから：

突然のメールに、早速のお返事、恐縮に存じます。

貴重な情報ありがとうございました。早速、調べて見ます。

■7/6 愛媛のピエロさんから「お尋ね」

小生は、「松山東高校29年卒」のホームページを管理させているものです。

「久万町」に住んでいます。同期生（関東在住）から次のような質問が書き込まれました。もしかして、情報をお持ちになって折られるのではと、思いまして、書き込みさせていただきました。失礼なことで申し訳ありませんが、手がかりをお与え頂けませんでしょうか。よろしく願いいたします。

（以下、書き込みを再掲させていただきます。

今年は、松山大空襲から58年になります。

先月、久しぶりに松山に帰り、堀の内を散策していたところ、戦時中の一時期、堀の内の連隊にいたことのある古老から「ここは戦災で焼けましたか」と聞かれました。長年通った堀の内ですが、恥ずかしながら即答できませんでした。

「松山城は残ったー松山大空襲の記録」（平成元年刊）によると、昭和20年7月26日の空襲で堀の内の「営所は一部燃えたが、南の大部分は焼け残り、戦後も長く使用された」とある。

ところが当時、堀の内にはいた陸軍第三航空教育隊員（元軍曹）のホームページによると、堀の内の「十数棟あった兵舎は総て木造で、僅かに煉瓦造りの連隊本部だけ残して、この夜焼失した。およそ二千人はいた兵隊たちの中からも多数の犠牲者を出したが、『軍の機密』で詳細は公表されなかった」とある。

また「愛媛の郷土部隊」（昭和63年刊）には、「松山空襲の際には、この教育隊の大部分は堀の内兵舎から退去していた」とある。

果たして、どちらが真実か。

戦前は、県庁側の北門から堀の内に入ると、左手に二階建ての連隊本部があり、右手の競輪場の辺りに兵舎が並んでいたと聞いたことがあります。

堀の内公園を管理する松山市役所の公園緑地課に聞いてみました。手に負えな

いらしく電話は文化財課に回され、「市史の資料編にも記録はありません」という返事。大空襲で堀の内はどうなったのでしょうか。どなたかご存知ないですか。

(以上、でございます)

HOME PAGE:

<http://www2.ezbbs.net/02/pikuma/>

●7/7 原田からコメント：

お尋ねのHPは私の「50年目の松山」という小説（戦争を語り継ぐ）のことかと思います。

<http://nazuna.com/tom/war/09-50nenmenomatuyama01.html>

<http://nazuna.com/tom/war/10-50nenmenomatuyama02.html>

1945年の松山空襲の2日前に、第三航空教育隊から仙台の予備士官学校に転属しましたから空襲のときの堀之内のことは不確かです。

但し、小説は「松山城は残った」と「松山市史」を参考にしたものです。空襲の記録は松山市の農政課の友人にも協力してもらって何周年記念かのプリントも参考にしました。

私がいたのは第1中隊でした。現在のNHKのところにありました。

戦後兵舎を学校に使っていたとすれば木造で焼け残ったのだと思います。

松山在住の方はぜひ戦時中の記録を調査してください。

第三航空教育隊の生き残りも生存しておられるはずです。

有事法が出来たのでいつ国民は動員されるかわからない時代になりました。

これはあなた方皆んなの問題です。

■7/7 ピエロこと三橋さんから：

いち早く、ご丁寧なお返事を有り難うございました。

昨夜、ホームページを全て拝見させていただきました。

私は、小学校の低学年でした。

松山連隊へは、一度だけ、

「松沢信二」曹長だったか記憶に定かではないのですが、招待されて、衛門をくぐったことがあります。

もうそのときは、食料も不足勝ち、でも、

「小豆のぜんざい」をご馳走になりました。甘かった事は良く覚えています。

大街道の「こまどり」という喫茶店にも、連れて行ってもら

いました。

そんなことを「原田さん」の「私的小説」で思い出しました。

松山空襲では、道後にあった家から、東野の方に逃げたものです。

お忙しい中をわざわざお返事を頂戴して、まことに申し訳ありませんでした。

「ピエロ」は、戦争に絶対反対です。
ホームページでも、そのステッカーを貼る運動を
イランの戦争を期に、全国の仲間に訴えてきました。
小さなことですが、私に出来ることから・・・。

重ねて、御礼もうしあげます。
お元気に、ご活躍ください。

平和な日々が続きますように・・・。

「ピエロ」
<http://www1.quolia.com/kuma-PIERO/>
「東の窓」掲示板
<http://www2.ezbbs.net/02/pikuma/>
「画集サイト」・・・一度覗いて見てください。
<http://plaza.rakuten.co.jp/piero3284/>

=====
■ 7/8 明神さんから：

はじめまして！ 愛媛のピエロの管理する「松山東高校 29 年卒」のホームページに「堀の内の営所は戦災で焼失？」を投稿したのは、私です。
早速、ご返事をお寄せ頂きありがとうございますありがとうございました。

松山で編成され、最後はニューギニアで殆ど全滅した「南洋第六支隊」を調べています。この関連で、松山に出かけた際、質問を受けて答えることができず、松山在住の同期生なら記憶にあるだろうと、ホームページに掲載したという訳

です。

松山市の空襲については、書かれたものがありますが、市の中心部にあった場所がどうなったのか、その詳しい記録は残念ながら見当たりません。

原田さまの「50年目の松山」を読ませていただき、ドキュメントタッチだったものですから、参考情報として一部引用させていただきました。

原田さまの仰るとおり、早く関係者のヒアリングをしておく必要があります。これを契機に少し調べて見ようと思っています。

「南洋第六支隊」についても、参考になる情報がありましたら、お教えください。

以上、お礼とお願いです。失礼します。

●原田からのコメント：

メール有り難うございました。

また、その内ゆっくり通信します。

私のメルマガ電子耕を読んでください。

■7/6 森さんから：記念号に

記念の号にふさわしい本かどうかは分かりませんが、寄稿します。多分、文学史に残るものと思います。ただし、それにしても小生の紹介は軽すぎます。弁解じみですが、読んで頂けるように期待しての紹介です。

原田太郎様の日頃のお世話に記念の号ゆえに御礼を。森拝

●原田からコメント：4周年記念の原稿ありがとうございます。森さんのコラムが楽しみだという＜読者の声＞が個人的にありました。今後もよろしく願いします。

■7/8 斎藤さんから：

(投稿が遅れて) 心配かけましてすみません。

隣の畑のデッドコーンの生長がはやく見ている間に私の背をこしました、いよいよ夏本番となります。

<舌耕のネタ>「長寿の秘訣・楽しく遊ぼう」

長生きの秘訣について、いろいろ言われていますが、百歳以上を生きた人に会ったり話を聞いてみると特別な健康法を続けていることはないようです。

みんな明治の人ですから、粗食で小食、適度の運動と十分な睡眠。それに共通なのは自立心と生き甲斐をもって自然流で生きてこられたということです。

さて、現代に生まれた私たちはどうしたら良いのか。ある人に言わせると「でしゃばりで、気障で、お洒落で、ノー天気、ちょっとエッチで、カラオケ大好き」が長寿の条件だそうです。

また、趣味を多く持つこと。囲碁、将棋、楽器演奏、ゴルフ、社交ダンス、農耕・園芸がよいと言います。とくにボケ防止には男女と一緒に社交ダンスをやるのが最高だそうです。

散歩はもちろん良いのですが、私は雨の日などはエアロバイクをこいでいます。女優の森光子さんも毎朝エアロバイクをやっているそうですが、自転車に乗って脚の運動をすると同じ効果があると言います。自転車は時速23キロで10分走るとドラム缶1本分の血液が循環するので、酸素摂取量が多くなり呼吸器系と循環器系の機能が大幅に改善されると言われています。

いずれにしても、自分の好きなことで、身体を動かし、楽天的に毎日楽しく生きることです。(原田勉)

お暇の方は、私のいる農文協図書館に遠慮なく遊びに来て下さい。

私は月・水・金の10時から17時まで出勤して読書相談にのっています。食生活・健康・農業の本がありますので読者のみなさまもお出かけ下さい。

私に電話下されば役員室でお待ちしています。

JR吉祥寺駅北口から西武バスで10分、関町南2丁目です。電話は03-3928-7440。次項のうどん打ちも同じ会場です。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/>

<募集・うどん打ち実演>大久保さんの高齢者と女性にやさしい方法指導

来る7月30日(水)、農文協図書館

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/>

で大久保裕弘さんのうどん打ち実演を10時30分から行い、冷やしうどんの試食をして貰います。読者の皆さん友人をお誘いのうえご参加下さい。

『電子耕』6月12日111号

<http://macky.nifty.com/cgi-bin/bndisp.cgi?M-ID=1283&FN=20030612094625>

で栗田さんが「私にもできた十割そば」を紹介しましたが、このたび大久保さんの好意でもっと簡単な誰でもできる「うどん打ち」を実演指導して下さることになりました。材料(薄力粉)や器具はこちらで用意します。定員5人位まで。締切は7月21日、定員になったら締切ます。

テキストは『誰でも打てる十割そば』(定価1100円・農文協)です。ご希望の方にお分けします。

(参加費500円、メールで『電子耕』にお申し込みください)

tom@nazuna.com 原田勉

<話題図書>「大養生」百歳人生に近藤康男登場 文芸春秋社7月増刊号

<http://www.bunshun.co.jp/rinzou/daiyojo/daiyojo.htm>

T編集長からの手紙によると先に「長寿と健康」の増刊号を出したが今号は、「より具体的に心と身体のことを考え、西洋近代医学からの「健康観」で百数十年やってきて、今いろいろな問題を抱えているように思い、忘れかけている「養生」ということに着目してみました。この考えで生きていくことに元気を貰う気持ちが小生に生まれたからです。そういう願いが読者に伝わっていくことを念じております」とあった。

近藤康男のインタビューは、「百歳人の健康と生き甲斐」10人の一人として農民の心を知り、過去を忘れない農学者と紹介されている。

私は、この企画の話を知ったときから「長生きばかりが能ではない」と思っていた。長寿の人の真似は簡単にできないからだ。それよりガンなどの病気の人の生き方が知りたいと。それについてこの雑誌は見事に応えてくれた。

「ガンになる理由と治し方」など名医による成人病の予防と対策が満載されている。それにガンになった人の生き方が具体例で紹介されている。例えば、

- 1、ただ生きようと思うのではなく、自分が自分の主治医になったつもりで、病気をしっかりと見つめて、前向きな姿勢で治療を受け、ガンと闘っていくこと。
- 2、今日一日の生きる具体的な目標を自覚して、全力投球をすること。
- 3、人のためになることをすること。(柳田邦男)

そのほか、誰でもいつかは通る道、病気の予防、かかったときの指針をしめして、日頃からどのように身体をいたわり、何を食べ、何を心がけたら良いか。はじめにのべたT編集長の願いが全編にわたって行き渡っている。高齢者にはぜひ座右の書として読んで頂きたい雑誌である。

<晴耕雨読10>農村クラブの子どもたち 田んぼのおばさん

6/26

近くの小学校へ本を読みに行っている。流行の『読み聞かせ』である。その学校に『農村クラブ』というクラブが生まれたと聞き、うれしくなった。

この小学校へ本を読みに行くようになって3年になる。6年生を担当することが多いのだが、毎年雰囲気の違いに驚く。おませな学年、おとなしい学年、やんちゃな学年、それぞれに持ち味があって楽しいのだが、今年は実に元気でやんちゃな子どもたちがそろっている。

その6年生数人が中心になって4・5年生を集め『農村クラブ』を作ったのだそう。校庭を開墾して野菜を作ったり、案山子を立てたりするという。そこで、わが田んぼの隣にまいた麦畑の話をした。麦刈りを一緒にやらないかと誘ってみたのである。いまだきの学校は怪我や事故を心配してなかなか腰を上げないが、子どもたちの好奇心に応えてくれた。

去年、隣が宅地として売られ日当たりが悪くなってしまったが元々の土地が肥えていたのだろう、春先から青々とした麦が風にそよぎ、6月に入ると見事な麦秋を迎えた。そんな入梅目前のとある午後、15人の子どもたちと先生2人はそれぞれの手に鎌を持ち、一株ずつだが手で刈り取り、車のトランク一杯の麦を抱えて帰っていったのである。

農村クラブの発起人は6年生で、大きくなったら農業をやりたいという少年。鎌の持ち方から、刈り取った麦の抱え方まで、彼なりのこだわりを持っているようで頼もしい限り。そんな子どもたちの好奇心に答えてくれた学校や先生方、また畑までの道のりをサポートしてくれたお母さんたち、と、まだまだ学校も捨てたものじゃない。田んぼのおばさんにも新たな夢が見つかった気分の麦刈りとなった。

田んぼのおばさん

<http://homepage3.nifty.com/half-farmer/index.htm>

<丹羽敏明の戦争体験> 13、シンガポール・要領をもって本分とすべし
6/26

作業隊の起床時間は5時。朝食は夕食と同じ乾燥野菜の入ったオジヤとカンコンというさつま芋の蔓のような葉が入った汁（塩味）が、それぞれ飯盒の中蓋と蓋に一杯、それに昼食に持ってゆく大判のビスケットが一箱（20枚入り）配給された。ビスケット1箱は5食分、つまり1食4枚である。「これだけか」とがっかりしたが、不満の持っていく所はない。出かける前に2〜3枚口にした者もいた。

広場に集合し隊列を組んで出入り口のユニオンジャックに敬礼して出かけた。目的地の作業場は過酷で名だたる第一作業場である。なるほど凄い資材の山だ。巨大な鉄骨や分厚い鉄板が膨大な広場にぎっしりと無造作に置いてある。それを一定の場所に移動して整理するのが今日の仕事である。監督はうわき通りの赤鬼豪州兵だ。南方の日差しは強い。鉄材は触れられないくらいに熱くなっている。手拭いを肩にあてて運ぶのだが腹がすいているから足元がふらつく。足の運びは遅い。そうすると赤鬼が鞭を振るって「カムオン、ハリアップ」と怒鳴る。怒鳴られても仕事ははかどらない。再び赤鬼が「カムオン」と叫んで鞭を鳴らす。

こうして怒鳴られながら仕事をして昼休みとなった。昼食はビスケット4枚。あっという間に食べ終わり水で腹を膨らませ日陰で寝ころんでいると、われわれを引率してきた海軍の士官がきて「そのままの姿勢で聞け。お前たちは今日が初めての作業で、厳しさに驚いたことと思う。こういう状態がこれから

毎日続くわけだから、絶対に無理をするな。真面目に働かなくてよろしい。適当に手を抜くことを考えよ。お前たちはいずれ日本へ帰って荒廃した国土の再建に当たる身であることを忘れるな。その日まで体を大事にしろ。病気やケガをしたらつまらんぞ。赤鬼が怒鳴っても気にするな。奴の姿が見えたらお互いに大声を掛け合って如何にも仕事をしているらしく振る舞え。適当にさぼるんだ。問題になったら最後は俺が責任をとるから安心しろ。要するに要領を本分とすべしだ。分かったな。」と訓戒をして行った。私は日本軍にもこういう肝っ玉の太い頼もしい指揮官がいたことに感動した。

午後の作業は指揮官の忠告のお陰で気分的に非常に楽になった。言われたように赤鬼の姿が見えたらお互いに大声を出して「セーノ」とか「ヨッコラショ」と掛け声をかけて仕事をした。声を出すことによって仕事が軽やかに進んだ。海軍士官の言やますます良しである。こうして無事に一日の労働が終わり、再び隊列を組んでキャンプに帰る。例によってユニオンジャックに「ホチョートレー、カシラーミギ」をやらされる。疲労困憊した体に苦痛が倍加する。せめてこれが日の丸なら少しは癒されるのだが。

<日本たまご事情> 「シンガポール・たまご事情」 愛鶏園・斎藤富士雄
7/8

先日、シンガポールの養鶏家 Koh さん親子がやってきた。丁度 SARS 騒ぎの真っ最中であるし、こちらも警戒した。話しているうちに、どこの国でもその国独特の問題があり、またそれを解決するのに特別な智恵を持っているものだと感じ入った。

ご存知のごとくシンガポールは天然資源もなにもなく、東京都ほどの小さな島に300万人少々の人が住んでいる。立地的に言えば他の周辺諸国がそうであるように、貧しい南方の小島であっても不思議はない。

ところが周辺諸国に比べてダントツに所得が多く、この国だけが突出している、何故であろうか？

以前、シンガポールのチャンギ国際空港を訪ねたことがあるが、それは成田空港を凌ぐものであったし、とても300万人の国のものとは思えなかった。

資源、食糧、水さえ自国で賄えないシンガポール国民は徹底的にその「智慧」を国家生存の道具にした、優れたリーダーのもとにそれはかなり強権をもって押し進められた。

国家戦略として、貿易、金融、ハブ空港、コンテナ基地、加工貿易、観光、IT化、、に徹底的に力をいれた、いずれも「智慧」の産物だ。

この国の鶏卵の自給率は35%で、その消費量も正確な統計はないが国民一人あたり年間300個を超すという、日本に近いハイレベルである。

65%の鶏卵はすぐ隣のマレーシア他から半値ちかい価格で自由に入ってくる。シンガポール政府は自国の農産物になんら保護政策をとらない。

鶏卵もその例外ではない、このような状況下で鶏卵の自給率を35%から55%に高める計画が民間で進められている。

ここにもシンガポール養鶏家の智慧が生かされているのだが、日本が将来予測される安値の中国卵の輸入にただ脅えるのではなく、それに対処するヒントがKohさんの話に含まれていた、その話は次回。

齋藤 富士雄
(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

<森 清の読後感>丸谷才一『輝く日の宮』2003年6月 講談社刊、
1800円+税

7/6

丸谷才一『輝く日の宮』2003年6月刊、講談社、1800円+税

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=03030397>

丸谷才一の434ページに及ぶこの新作は、長篇小説としては10年前の『女ざかり』(文芸春秋、文春文庫)に次ぐというのが話題の一つである。司馬遼太郎は、小説を書くのは力技だといってある年齢から書かなくなり、愛読者を口惜しがらせた。1925年生まれの丸谷は、この本でまさに知的力技を見せて年齢を感じさせない。

丸谷才一の文章は、歴史的かな遣いに特徴がある。エッセイにしても推薦文にしてもその規範をはずれない。高齢の小説家などが亡くなると、「最後の文

人」などと形容されることが多いけれども、歴史的かな遣いを墨守している点ではまさに「最後の文人」といってよい。しかも、雅ではあっても思想も精神も古びていないところがいい。

この本は文人丸谷才一の集大成という評判である。それが当たっているかどうかは他の人に譲るとして、小説として面白いことは保証する。冒頭は0章である。30代の国文学者である主人公が少女だった頃に書いたという小説である。読者はそうとは分らない。「花は落花、春は微風の婀娜めく午後、・・」というように始まる。「微風」は「そよかぜ」、「午後」は「ひるから」とルビが振ってあり、純白の水兵服に紺のスカートの少女がすたすたと歩いてきて「婆や」が迎えに出るなど、まるで明治の小説を読むようである。それがその少女の習作であるとはわかるのは1章で、それからは現代風にずいずいと話が進む。しかし、クライマックスにはシンポジウムの紙上録音があり、それが90ページに及ぶ。それでも退屈させない。終章は、主人公が綴った『源氏物語』の1章と2章の間にあったかもしれない幻の章「輝く日の宮」という趣向である。ともかく、読者を翻弄しつつ、知的エンターテインメントを楽しませてくれるからご一読あれ。

『源氏物語』に幻の章があったのではというのは、次のような事情からである。それだけは明かしておいたほうがいだろう。始めの「桐壺」は、主人公の光源氏が生まれてから12歳の、元服、結婚までを扱っている。次の「帚木（ハハキギ）」は16歳のこととして書かれている。もっとも、「帚木」には年齢が書かれてなく、私が拠る「谷崎源氏」の採る説である。その12歳から16歳の間出来事として推察されているのが、光源氏が生母とも慕う継母にあたる藤壺の女御との出来事である。光源氏17歳の頃のこととして「藤壺」の巻が書かれているけれども、その巻で藤壺は光源氏と密通して子を宿していると明かされている。そうとはっきりは書かれていないが、そうと分かる。ところが、その密通は17歳が始めてではなく、もっと若い頃、藤壺を慕い、忍んで会いに行くということがあり、そのあたりを書いたのが幻の章ではないかというのである。紫式部はその章を書いたけれども、何故か欠落して流布されたことの謎解きを主人公が推論し、そのことを丸谷がこの小説で展開している。

その、本筋の話も興味深いことながら、国文学者で女ざかりの主人公の生活振りを追うのも面白い。一度は結婚して2年ほどで別れ、学者として注目されるようになった主人公は、若い同学の妻ある男性と食事をして何となく家に誘

い、共寝をしてしばらく同棲する。けれども、その男は半年で妻のもとに戻る。それからしばらくして主人公は、ヨーロッパ旅行に出てローマ空港で同年輩の男性と出会い、あるいきさつがあってホテルへ行き、つまりは共寝をして日本に帰っても偶然に出会ってよい仲になる。その関係は、主人公がその男性と結婚するかと思うけれどもはぐらかされ、しかしずっとあとでその男性の喜劇的な一身上の都合で結婚申し込みを受け、しかしそういう気持ちにはなれないとして距離が遠くなるといったものである。ところが、小説の終わり近く、主人公の弟子にあたる女性はその男性と関係が出来、その報告を聞かされる。報告に来た弟子は、男がベッドを共にしても「おできにならなくて。ワインのせいとおつしやつてましたけど。」といい、しかし「でも、お上手でした」という。主人公は、その話を自分のこととして納得して「さう」とうなずく。そうして主人公は、「生きてゆくのはあれこれと面倒で、厄介だし、それがもうしばらくつづくわけだと自分に言い聞かせた。」

人の生きていることのひだの深さは、『女ざかり』でもそうだったけれども、性と生とのほどよい関わりから生まれると丸谷は考えている。しかもそれ故の人生の奥深さは、平安朝からいまの平成朝にまで変わりなしと丸谷は見てこの小説を書いた。そう思える。優れた人生論の小説であると読んだ。

この本を読み終えて谷崎源氏を開き、まずは「桐壺」を読んでこの小説の終章を読み、次いで谷崎の「帚木」に戻って読んだ。文体が違うこともあって、びたりとつながるとは思えなかったけれども、光源氏がより鮮明に浮かぶとは思えた。あるいは、他の女流小説家の源氏でもう一度同じ試みをしてみるとどうなるか。瀬戸内と丸谷は源氏物語について何度か対談しているほどだから、あるいは丸谷源氏は瀬戸内のそれに近いかもしれない。

いまなぜ源氏なのか。それは、『源氏物語』が「紀元 1000 年の数年後におそらく完成してゐた」（丸谷才一訳、C・P・スノウ「光り輝く君」、丸谷編著『ロンドンで本を読む』2001年、マガジンハウス）からである。丸谷は、2000年の数年後を目指してこの本を書き続けてきたと思われる。

森 清

<http://homepage2.nifty.com/morikiyoshi/>

<ガンとの闘い> 納得のゆく治療は患者自身の判断で （原田勉）

近ごろ知識も広く有能で農学ではリーダーシップをとっていた友人がガンで亡くなる例が多い。残念なのは、その人たちが科学的知識は充分あるのに自分の病気になると医者に行くのをためらうのか、多くが手遅れである。

ガンになることはある程度やむを得ないが、もっと早く良い医療機関を選び早く診断・発見すれば、自身の判断で納得のゆく治療を受け、あるいは終末のあり方を選ぶことができたのと思うのである。読者の中にもガンを抱えている方がおられると思う。死者に鞭打つことではないかという批判もあるが、あえて前者の轍を踏むまいという意味で申し上げたい。

ガンは死病という考えは古い。ガンになったから必ずしも不幸とも言えない。ガン治療技術はこの5年間で急速に進歩し、適切に対処すればガンは治る病気になった。あるいは慢性的に推移して管理が良ければ寿命いっぱい生きることも不可能ではなくなった。ガンと付き合い、ガンを治すためにも、患者が「自分の命を守るのは自分しかない」という姿勢で「医者まかせ」ではなく自分が主治医になったつもりで自身が判断・対処する時代である。

肝臓ガンで亡くなった友人も前に兆候はあったが入院したのは黄疸になってからだった。胃ガンで亡くなった人も進行が早かった。前立腺ガンの友も腰骨に転移して歩行が困難になってからである。悪性リンパ腫の友人も第4期になって内蔵のリンパまで侵されていた。もっと早く診断を受けていれば、いろいろな治療法があった筈だ。たとえ治らなくても残った時間を計画的に有意義に生きることが出来た筈だ。

また、最近では「早期発見・早期治療が絶対ではない」と変わってきた。早さだけでなく、治療するのにちょうどいいタイミングの「適時発見」という医師もいる。主治医の判断と処置について疑問があれば、別の医師の意見を聞く「セカンド・オピニオン」という考え方も普及してきた。専門の医学雑誌もあり、インターネットによる情報提供も増えて、無料相談室や患者同士の情報交流も具体的で親切になっている。高齢者でパソコンが出来ぬとも子供や甥・姪が患者にかわって相談する例も多い。

ガン告知も普通になって患者も隠さず公表すれば、お互いに助け合うことが出来る。ガンとの付き合い、免疫力を強めて延命する闘いも患者自身の判断でという自覚が大切である。

<私の近況報告> 6月26ー7月9日 (一日一日を楽しく動く)

6月24日、文芸春秋7月増刊号「大養生」が届く。近藤康男先生のインタビューが載っている。大半を一晩で読み、ガン関連は学ぶところ多い。ガン友にも送ろうと5冊注文する。別項新刊紹介参照。

27日、近藤康男先生自宅を訪問。最近では朝夕庭・畑を散歩という元気だが、右目の白内障が進行して拡大読書器でも見えないというので、7月下旬手術の予定。読みたい古い文書があるからとワープロ作業のために預かる。

27日午後、クラス同人の情報交換に学友来る。1945年の敗戦をどこで迎えたか、その後のお互いの経歴を話し合う。50年余り付き合ってきたのに意外に知らない過去を語り合うのに私のホームページが役に立つ。

このホームページは死後何年かは開いてみる人もあるかと思う。「電腦碑」あるいは「電腦墓」として遺すのも有効か。研究してみる必要がある。

28日、佃島・月島探訪、もんじゃ焼きを食べてみる。シルバーパスで都営地下鉄大江戸線の便利さ、リバーサイドのハイキングの楽しさを認識する。

29日、家庭菜園のキュウリ、トマト、茄子の収穫、ニラの刈り取りをする。わずか6坪ながら毎日作物の成長をながめ、日曜日に収穫するのは楽しみであるし、免疫力の増加・生き甲斐療法になると思う。

7月2日、日本農業新聞時代、駆け出し記者に原稿の書き方、写真の撮り方、インタビューなどの手ほどきを受けた恩師の川井一之氏が6月29日に亡くなった。そのお通夜にお参りする。広く知らせず簡素にという遺言で、参会者は少なかったが友人と思いを語り合った。

4日、西東京市谷戸公民館から農文協図書館の取材あり。公民館情報に文化施設の紹介をしたいとのこと。旧田無と保谷は近郊農村であったが近年は宅地造成が進んで農業者が少なくなり、市の図書館でも農林園芸書が少ない。すぐ隣町に農林水産専門図書館があるのでぜひ利用したい。ついては内容と利用状況を知りたいとのことでした。

私も西東京市の住民なので、個人的にも生涯学習などのお手伝いをしたいと申し込む。『メールマガジンの楽しみ方』も初めてというので寄贈する。

5日、山崎農業研究所の総会・シンポジウムに参加する。詳しくは次号で紹介したい。『耕』97号の巻頭言に私の「イラク戦争と食料・農業を考える」が掲載された。その他の記事は次号に。

9日、骨髄腫患者の会として厚生労働省へ次の要望書を提出するため代表10人の一人として陳情に参加する。

「多発性骨髄腫の治療薬であるサリドマイド及びベルケートの早期承認と健康保険適用を要望する」

痛みで動けない多くの患者の代わりにせめてものできる奉仕をしたいと。

次回 114号の締め切りは7月21日、発行は24日の予定です。

113号は創刊（1999年）以来、満4年目の発行になりました。

読者の皆さん有り難うございました。今後もよろしくお願ひ致します。

— P R —

■■■■ 劇団文化座 第117回公演 作 堀江安夫 演出 佐々木雄二

■■■□ 『若夏(うりずん)に還らず』

■■□□ ---森口豁(もりぐち・かつ)「最後の学徒兵」より---

■□□□ 公演期間 7月14日(月)～18日(金) 会場 三百人劇場

□□□□ 料金 一般 4200円 高校生以下 2100円(税込)

□□□□ ★劇団他にて前売券発売中★

その他の地方の公演スケジュールは、

<http://bunkaza.com/>

森口豁「最後の学徒兵」

<http://www.cyber-rabbit.com/katsu/books/04.html>

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=96032011>

森口豁の沖縄通信

<http://www.cyber-rabbit.com/katsu/>

2001年初演時情報

<http://bunkaza.com/play/urizun/200101.html>

— P R —

◎お願ひ「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名(見出し)を必ず書くこと。読みたくなる見出しを簡潔・明瞭に。

- 「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的にズバリと書き出す。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めの方に書く。
 - 3、1回1テーマ、書き出し・本文・結論を10行位にまとめる。
 - 4、送信する前に、何を言わんとするか、読み返し、推敲することが大切。
 - 5、ホームページを持っている人は、文末にURLをつける。
 - 6、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックをする。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。htmlメールもご遠慮ください。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：本体700円+税 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/10.html>

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』」 第113号

バックナンバー・購読申し込み/解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

2003.7.10（木）発行 西東京市・ひばりが丘 原田 勉

<mailto:tom@nazuna.com>

発行部数 1761 部 **ここまで『電子耕』*****